

KIDSNA(キズナ) > エンタメ > 取材レポート > 【学びのカタチ】ホンモノを見て対話する…



【学びのカタチ】ホンモノを見て対話するミュージアムという学び場

2020年の教育改革を目の前に、進化の真っ最中を生きる現代の子どもたち。私たち親が受けてきた教育が当たり前ではなくなるこれからの時代に、子どもたちに必要な教育とは何か？この連載では、従来の評価で計ることのできない独自の視点で子どもの能力を伸ばす、新しい「学びのカタチ」について紹介していく。第5回では、上野公園にある9つのミュージアムと連動したプロジェクト「Museum Start あいうえの」の推進役である、東京藝術大学の伊藤達矢さん、東京都美術館の河野佑美さんに話を聞いた。

<連載企画> 学びのカタチ

✓ミュージアムは“大人と子どもが対等に学び合う場所”

✓アートを通して子どもは何を学ぶのか？

シェア 242

ツイート

LINE 送る

学
力
や
成
績
の
向
上
に
日
々
励
む
子
ど
も
た
ち
に
必
要
な
も
の
は



- 妊娠 >
- 出産 >
- 教育 >
- 健康 >
- 遊び >
- レシピ動画 >
- 暮らし >
- ママのこと >
- ライフスタイル >
- エンタメ >

おすすめ記事

- 公園ピクニックやお外ランチにも！子どもとのおでかけにぴっ…

数島製パン株式会社 PR
- 【がん保険のシミュレーション】しっかり治療と向き合うために…

FWD富士生命保険株式会社 PR
- 電子レンジでたったの50秒！「手軽」で「おいしい」赤ちゃんの…

ビジョン株式会社 PR
- 保険は本当に必要？ママたちに聞く、加入している保険や選ぶ基準

FWD富士生命保険株式会社 PR

連載記事

世界の教育と子育て

特別連載
Sponsored by Pasco

#宗教 #LGBT #セックス
#多様性 #性教育
学校では教えてくれない

▶ 連載一覧へ



探求心



大人と子どもの世界を
遮断するのではなく



ランキング

- 

【学校では教えてくれない】新旧の価値観が混ざった社会で自分…
 <連載企画> 学校では教えてくれ…
- 

【インドの教育】トップクラスのIT人材を生むエリート教育
 <連載企画> 世界の教育と子育て
- 

【天才の育て方】大川翔〜14歳で高校卒業、名門5大学合格の“ギ…
 <連載企画> 天才の育て方
- 

抜群の機能性と安全性。素材にもこだわったベビー食器5選
- 

【学校では教えてくれない】日本経済を良くするための“革命”に…
 <連載企画> 学校では教えてくれ…

保育士認定サービス



広告掲載お問い合わせ

KIDSNAでサービス・商品情報を届けたい企業様へ



キーワード

- 秋
- 共働き
- お受験

▶ キーワード一覧へ

対等に“ホンモノ”に触れ、
他者と対話をすることで
自分で考え、発見できる

思考力と
自己肯定感を育む

“美術館での新体験”
とは

ミュージアムは“大人と子どもが対等に学び合う場所”

“ミュージアム”と聞くと、どんなイメージがあるだろうか。

「美術館や博物館は、展示物を静かに鑑賞する場所」「子どもが騒いだら周りに迷惑がかかる」という思いから、訪れる機会のない家庭は多いかもしれない。

そんな心配を払拭し、子どもと大人がともにアートに出会い、楽しむことを目的に、2013年に立ち上がったプロジェクトが「Museum Start あいうえの」（以下、ミュージアムスタート）だ。

その舞台は、上野の森美術館、国立西洋美術館、東京都美術館、東京国立博物館、恩賜上野動物園、国立国会図書館 国際子ども図書館、国立科学博物館、東京藝術大学、東京文化会館の9つが集まる上野公園。



美術館や博物館だけでなく、動物園や図書館、音楽ホール、そして芸術大学までが歩いて行かれる場所にあり、世界中から“本物”が集まってくる。豊富な文化資源が子どもや大人の好奇心に応え、学びのスケールが広がるダイナミックなミュージアム連携が行われている。

運営チームとして携わる、東京藝術大学特任准教授であり、プロジェクト・マネージャの伊藤達矢さんと、東京都美術館の学芸員であり、アート・コミュニケーション系の河野佑美さんに話を聞いた。

コミュニケーションを軸にアートを体験

その名にある通り、あいうえのはすべての子どもたちの“ミュージアムスタート”を応援するところから始まった。この“ミュージアムスタート”という概念は、現在全国で展開されている“ブックスタート”に共感する部分があったと伊藤さんは語る。



伊藤さん「イギリスが発祥の読書の体験を広げていく『ブックスタート』というプロジェクトは、キャッチフレーズが“Share books with

your baby”なのだそうです。赤ちゃん和本を開く楽しいひと時を共有しようという趣旨の活動で、日本では各市区町村の乳幼児健診などに合わせて広く導入されています。この取り組みのように、ミュージアムでの体験を子どもも大人も対等な立場でシェア、つまり共有していただけるようなことが広がっていかれないかと考えて生まれたプロジェクトです。

子どもも大人も対等な立場でミュージアムをシェアする。そのために、あいうえののプログラムの中で一番の特徴となるのが、アート・コミュニケーターとの対話を通じた美術鑑賞の体験です」



東京都美術館「コートールド美術館展 魅惑の印象派」2019年

河野さん「アート・コミュニケーターのことを、東京都美術館では“とびラー”と呼んでいます。東京都美術館の『都美（とび）』と、『新しい扉（とびら）を開く』の意味が含まれた愛称で、学芸員や大学の教員などの専門家とともに活動する能動的な大人たちです。

現在は、会社員や教員、学生、フリーランサー、専業主婦や退職後の方など、18歳以上のさまざまな年代の約140人で構成されています。保護者や学校の先生でもない大人であるとびラーたちとフラットに対話を重ねることで、多様な価値観に出会うことができます」



伊藤さん「たとえば、教師や学芸員が生徒に何かを教えるという“知識を持っている人から知らない人へ知識を渡す”という一方通行の関係ではないんです。子どもと大人が対等にやりとりをして学べる関係性の中で、アートや文化と出会って得た発見や感動をシェアすることが大切です」

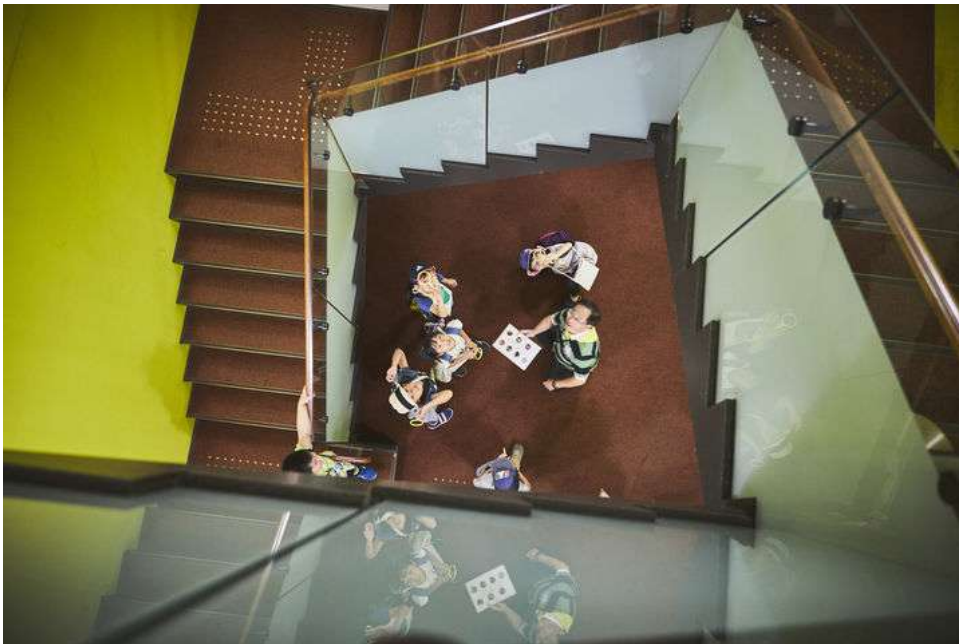
美術館のガイドツアーで展示作品の解説をする学芸員とはまた違った、子どもたちと対話しながら美術鑑賞をする大人たち。この対話を通じた鑑賞によって、子どもたちは何を学ぶのだろうか。

アートを通して子どもは何を学ぶのか？

多角的に対話を行うプログラム

「あいうえのでは、小学校1年生～高校3年生とその保護者を対象としたファミリープログラム、学校と連携した、スクールプログラムの他、児童養護施設や経済的に困難な家庭の子どもを支援しているNPOなどの団体と連携したダイバーシティプログラムがある。

なかでもファミリープログラムは、展覧会を鑑賞したり建築ツアーを行う『デビュー・プログラム』や、テーマに沿って9つのミュージアムをめぐる、鑑賞・冒険・観察・造形など、ミュージアムを縦横無尽に楽しむ『リピーター・プログラム』、映像作家を講師にむかえ、ミュージアムの魅力を映像にまとめる『ムービー部』などバラエティに富んだ内容だ。



「デビュー・プログラム」では、気になったところを深く掘り下げて考えるための「じろじろ虫めがね」を使って、館内を冒険。（撮影：中島佑輔）

伊藤さん「ファミリープログラムはみなさん親子で来られます。ですがプログラム中はあえて親子が別々に活動するようにしていて、子どもたちはアート・コミュニケーターと一緒に活動します。先生でも親でもない“今日のパートナー”である大人、それがとびラーです。

どのプログラムも共通して、まず子どもたちはとびラーとともに展示室へ出発し、まずはグループで鑑賞します。1作品に15分間くらいかけて、じっくりと作品を観察して、たとえば色、形、雰囲気など発見したことや気になったことを子どもたちに話してもらいます。

その後、ひとりで観る時間を作ることもあります。そうすることで、自分ひとりだけで見るよりも多様な視点で作品が見られるようになっていくのですね。

とびラーは子どもの言葉の聞き役になります。しっかり聞いてくれる人がいるから、子ども達も話したくなるんです。そして共に考え、発見したことを共有する仲間になります。そうした大人と対等な目線で活動する体験は、子どもたちの興味や関心を大きく育むだけでなく、子どもたちの自己肯定感を育てることにもつながっています」



保護者はとびラーとともに一部プログラムを体験できるほか、親子でミュージアムを 楽しむコツのガイダンスを体験することもできる。(上野の森美術館「VOCA展2017」2017年)

——作品を鑑賞するという事は、ただ眼で見るものではないということですね。

伊藤さん「物をよく見て、発見したことを誰かと共有することは、実はもっと深い問いにつながっていたり、広い世界につながっていたりするんです。

でも、自分が思ったことを誰かに伝えるって実はとても勇気のいることだったりします。間違ったことを言ったら恥ずかしいとか、人と違うかもって思うと誰でも話すことを躊躇してしまいます。

でも、どんな意見でも話しても大丈夫だと思える安心できる人たちに囲まれていれば、感じたこと、考えたことをどんどん話すことができるものです。とびラーの役割はそんな誰もが安心して話せる場作りをすることにあります。

「この絵の中でどんなことが起きていると思う？」や「どこからそう思った？」という質問をとびラーが子どもたちにすることがあります。でも実はその質問よりももっと大切なのは、子どもたちが話してくれた内容を否定せずに受け止めているという姿勢そのものなんだと思います。

子どもたちにしてみれば、受け止めてくれているかどうかなんて見たらすぐ分かってしまいますから。とびラーたちが持っているのは、子どもたちに何かを伝えるための話す力ではなく、子どもたちの声を聞く力なんです」



行われるプログラムの参加費は無料。「ビビハドトカダブック」というミュージアムの基本情報やルール、楽しみ方のヒントが掲載された冊子と、子どもたちがプログラムのあとでその日の発見や感想、大切に感じたことを記録できる「冒険ノート」がセットになった「ミュージアム・スタート・バック」というスターターキットも参加者全員にプレゼントされる。(イラスト: 松尾由佳 (Nica))

知らない人たちの中で、自分を確立していく

——現場で、子どもってすごいと思うことはありますか？



河野さん「子どもたちは親から離れるといきいきとするんですよ（笑）。親がどう子どもの声を聞けるようになるか、保護者の時間が重要。子どもたちがのびのびして戻ってきたとき、親がすごくびっくりしています。

最初のあいさつのときって、子どもたちは少し緊張しているんですね。あいさつのと、いってらっしゃいって展示室に送りだして、子どもたちはとびラーといっしょに作品を観る時間を過ごして、帰ってくる。

行く前と、帰ってきた後では、温度感がすごく違うんです。表情も、目がきらきらしていたり、頬が紅潮していたり。

これまで学校の教科書や図鑑で見ていたものが、ここでは世界中から集まったホンモノを間近に観られる。そうして好奇心や探求心を刺激されただけではなく、観察力や思考力、コミュニケーション力も育まれます。



作品を見て感じたことをグループ内で発表し合うことも。（上野の森美術館「VOCA展2017」2017年）

親でもない先生でもない味方になってくれる大人がそこにいる、自分の話も聞いてもらえて、人の話も聞ける環境があって。同じ場所に来た他の子どもたちが、自分と全然違うことに気づく。自分じゃない誰かのことをしっかり認識できる。

そんな環境の中で、対話をしながら、よく観て、考え、発見する。それをとびラーや参加した子どもたちと伝え合い、最後は自分の好きな作品や、感じたことなどをブックに書き込んでもらう。アートを通じて、こんな風に子どもたちは学んでいくんです。

毎回、違う子どもたちで、保護者の考えもそれぞれだけど、保護者と離れるときの不安な顔から、プログラムが終わって保護者と再会したときの『なんだ、待ってたんだ』という顔は、本当にピフォー・アフターですね」

後編では、なぜ子どもたちに美術館や博物館などのミュージアム体験が必要なのか、そして対話を通して学ぶあいうえのの未来について話を聞く。

トップ画像：「コートールド美術館展 魅惑の印象派」東京都美術館、2019年

記事内写真：ミュージアム・スタート あいうえの運営チーム提供

※2020年度のプログラムは7月15日（水）に公開予定。詳しくは、公式Webサイトをご確認ください。

[ミュージアム・スタート あいうえの/Webサイト](#)

<取材・撮影・執筆> KIDSNA編集部



エンタメ > 取材レポート

【学びのカタチ】共有と共生。子どもにミュージアムが必要な理由

2020年の教育改革を目の前に、進化の真つ最中を生きる現代の子どもたち。私たち親が受けてきた教育が当たり前ではなくなるこれからの時代に、子どもたちに必要な教育とは何か？この連載では…

<連載企画> 学びのカタチ



エンタメ > 取材レポート

【学びのカタチ】親子に大切なことを教えてくれる遊びの学校

2020年の教育改革を目の前に、進化の真つ只中を生きる現代の子どもたち。親である私たちが受けてきた教育が当たり前でなくなるこれからの時代に、子どもに必要な教育とは何なのか？この連載では…

<連載企画> 学びのカタチ



エンタメ > 取材レポート

【学びのカタチ】地方と都市を結ぶ新しい学校のカタチ

2020年の教育改革を間近に迎え、新時代を生きるこれからの子どもたち。親である私たちが受けてきた教育があたりまえでなくなるこの時代、子どもに合った最適な教育とは何なのか？この連載では…

<連載企画> 学びのカタチ



<連載企画> 学びのカタチ バックナンバー

KIDSNAアプリで もっと楽しく、便利に。

App Store からダウンロード

Google Play で手に入れよう

2020年07月14日

- 子ども
- 幼児
- 教育

シェア 242

ツイート

送る



エンタメ > 取材レポート

【学びのカタチ】 科学を通して役目を学ぶインターナショナルスクール

2020年の教育改革を間近に迎え、新時代を生きるこれからの子どもたち。親である私たちが受けてきた教育があたりまえでなくなるこの時代、子どもに合った最適な教育とは何なのか？この連載で…

<連載企画> 学びのカタチ



教育 > 英語

自宅近くで留学体験！一生ものの英語が身につく、体験型プリスクール・学童保育とは

子どもには英語教育が必要なのか、どのように英語教育を始めればよいのか悩むママも多いと思います。英語のスクールに通っても本当に話せるようになるのか気になりますよね。そんなママたちに…

[PR] 株式会社ピーアップ



教育 > しつけ

しつけの方法がわからない。どこまで子どもにしつけるべきかのやり方について

子どものしつけに関しての方法やどこまで教えたらいいかなどについて、わからないと思ったことがあるママパパもいるかもしれません。正解がなく、難しく感じたりうまくいかなかったりするしつ…

専門家のコメント

24



すみっこ先生

保育士

わくわくしながら記事を読みました🍀…

コメントをもっと見る